

長

寫

世大受
以今考
之

第二十四潜水艦汽船檣城丸衝突事件ニ

関スル答申書

大正十年三月廿日

檣城丸船長

錦森庫次郎

吳泊軍艦豹橋丸

第十九潜水隊司令吉山百重殿

拝啓去ル二月十五日貴隊第二十四潜水艦ト汽船檣城丸ト衝突

致シ候件ニ付御訊問有之候間左ノ答申書

提出仕候也

衝突ノ場所 鍋島燈台ヨリノ方位 巨高

答 鍋島燈台ヨリノ方位 南東 微南 四三 南 巨高 約 羅 位

福田 類

海軍

三
八

海
軍

二衝突時刻

答二月十五日午前四時五十七分頃

二貴船の始り第二十四潜水艦ヲ認メタル際ノ

時刻

答二月十五日午前四時四十九分頃白紅燈ノミヲ認メ船體ハ

不明

四貴船ノ位置鍋島燈台ヨリノ方位一巨高

答鍋島燈台ヨリノ方位西微南二分一南一巨高壹海里

四方位

四貴船ヨリ見カレ潜水艦ノ方位一巨高

答始り紅燈ヲ見カレ頃ハ幾ト直向ニテ三海里以上ト認心ヲ

福田橋

耗

海軍

曰貴船ヨリ見タル右潜水艦燈光ノ状況

谷明亮

雨當時貴船ノ速力針路

谷凡ソ六海軍ナリキ針路ハ東微北ナリモ直チニ半點右轉セリ

其後貴船ノ操縦法

答本船殆ト船首ニ方リ貴艦ノ白紅燈ヲ認メタルコト以テ

警戒ヲ加ヘ且ソ航路ノ右側ニ偏スル目的ヲ以テ船首

ヲ少シク右轉シ東ニ方ニ北ニ針路ヲ定メタルニ

同時ニ右紅燈又ハ紅燈ヲ交差表示シ船首

ノ方向一定セラルコト以テ貴艦ハ氣笛一短声ヲ發シテ

右轉心ト殆ト同時ニ貴艦ハ氣笛一短声ヲ

福田綱

船

應答せしモ依然	丙船燈ヲ交モ表示セムヲ以テ本船
ヨリ再ハ汽笛一短	声ヲ吹鳴シタルニ其船亦之ニ
應答シ一短	声ヲ發シタルニモ杓ハラヌ益々接近シ
危険ナルヲ以テ	船首ヲ激右轉セルト同時貴船ハ
突然録燈ノミヲ	現ハシ左轉シ来ルニ依リ直千ニ
機関用意鐘ヲ	停止至速力後退ヲ令ヒタリ
五 貴船ヨリ見	タル路水艦ノ運動
答 前記ノ如ク	貴船ハ突然針路ヲ左轉シ疾走シ来リ本船
ヲ左舷船首ヨリ	針メニ「ト」ト云フ音響ヲ二回發シ横切リ
左ノ面ノ如ク	



海軍

四

海軍

右舷側後方ニ行過レ去リタリ	六、衝突直前貴船ノ速カ航ノ状況	答、機南停止後速カノ初期ニシテ速カハ不明航ハ右舷側	杯ニ偏通中	七、衝突シタル瞬間時ノ貴船針路	答、最初東ニ去リ北ニ轉ジタルニ危險ヲ迫セル故ハ右舷側	通轉セシメ固ク速カヲ退シ施シ船首ノ方向ヲ見ル邊	八、貴船損傷ノ所、損害程度	答、損傷ノ所ハ水面以下ニ屬シ審査ニ至ラス	潜水夫ノ言ニ依ルニ尤ノ如シ	船着材ハ水面以下ニ高攸格式足切斷セラル全
---------------	-----------------	---------------------------	-------	-----------------	----------------------------	-------------------------	---------------	----------------------	---------------	----------------------

福田納

100
102

(6)

部取替ヲ要ス云フ

老船船首材ト外釘ノ接合部高サ約八尺高トナリ

右舷船首ヨリ後方ニ高サ約七尺式寸長サ約七尺六

寸外釘破損セリ其ノ他附隨ノ船材折損セリ

損傷程度約冬萬圓位ト思ハレ料スルモ目下ニ於テ

寔情ナラス

九、貴船ハ水先人乗船ニアリヤ

答、本船ハ水先人乗船ト居ラス

(終)

福田 納

海 軍

1201

五三

大正十一年三月七日

海軍

第三十四潜水艦長心得 高木武雄

第三十四潜水艦(解支事件) 河合退藏 殿

衛美事件(周之汽船側) 情况別紙、通リ回答有之候間

御参考ノ迄ニ提出ス。

別紙一紙添

見玉橋

四
七

櫻城丸陳述書ノ寫シ

海軍

一 濟美ノ場所

鍋島砲台ノ南東ノ南 $\frac{3}{4}$ 南 約四鐘

二 衝突ノ時刻 二月十五日午 $\frac{1}{2}$ 時五十七分頃

三 櫻城丸ガ始テ $\frac{1}{2}$ 西潜水艦ヲ認メタル際ノ

(イ) 時刻 午前四時四十分頃 白紅燈ノミヲ認メ船体不明

(ロ) 櫻城丸位置 鍋島砲台ノ西微南 $\frac{1}{2}$ 南 一理四鐘位

(ハ) 櫻城丸ヲ見タル $\frac{1}{2}$ 西潜水艦ノ方位巨帝

製ドト真向ニテ三海里以上ト思フ

(ニ) 櫻城丸ノ見タル第三 $\frac{1}{2}$ 西潜水艦燈光ノ状況 一 明亮

(ホ) 櫻城丸ノ速力針路 一 角六海里ナリキ針路東微北ナリシモ

見玉稿

四
五

海軍

直ニ半兵右轉セリ

四 其後櫻城丸ノ操縦法

櫻城丸ノ船首ニ方リテ西潜水艦ノ白紅燈ヲ認メタル以テ發
 戒ヲ加ヘ其ノ航路ノ右側ニ偏スル目的ヲ以テ船首ヲサシク右轉
 シ東ニ方ニ北ニ針路ヲ定メテ瞬時ニシテ紅燈又ハ綠燈ヲ交
 表示シ船首ノ方向一定セラルテ流雷一短聲ヲ發シサシク右轉スル
 船ト同時ニ發シテ西潜水艦ハ流雷一短聲ヲ發シテ依然西航
 行ヲ支々表示セルヲ以テ櫻城丸ヨリ再ビ流雷一短聲ヲ吹鳴ニ
 發シテ西潜水艦亦之ニ應答シ一短聲ヲ發シテモ拘ラス蓋々
 接近シ危險タルヲ以テ船首ヲ激右轉セルト同時ニ西潜水艦ハ突
 然綠燈ヲ以テ現ハシテ右轉シ来ルニ依リ直ニ機関用意踵ヲ停止

見
五
節

全速力後退ヲ令マシタリ。

五、櫻丸ヲ見ル潜水艦ノ運動

前記ノ如ク方子西潜水艦ハ突進針路ヲ左轉シテ疾走ト来リ本

艦船首ヲ左舷船首ヨリ斜ニドリヌト云フ音響ヲ二回察シ

横切リ

左回ノ如ク

右舷側後方ニ行過レ去リ

六、衝突直前櫻丸ノ速力・舵ノ状況
料因停止後退全速力ノ初期ニシテ速力不明・舵ハ右舷一杯ニ偏回中。

↓ 最初東方ノ北ニ轉シテモ危険切迫セル後ハ右舷一杯ニ回轉

セシ且ツ全速力後退ヲ施シ船首ノ方向ヲ見ル旨アラサリシ

八、櫻丸ノ損傷的以テ損害程度

櫻丸

七、衝突シタル
時船ノ様
櫻丸ノ針路

海軍

損傷ヲ計ハ水面以下ニ屬シ審査ニ至ラズ

潜水夫ノ言ニ依リテ如シ

船首材ハ水面下ニ長約十二尺切斷セラルシ合部取替ヲ要スト云フ

左舷船首材ト外板ト接合部長サ約八尺離シタリ

右舷船首ヨリ後方ニ長サ約七尺二寸長サ約七尺六寸外板破損セリ

其ハ附随ノ船材折損セリ損害程度約參萬圓位ト思料

右ニ圖下ニ於テ審査スル

九、船首材ハ水先人形船ノ有様ニ乗船シ居ラス

(終)

註(右本誌ニ)

右ハ本船「貴船」等ノ字句ヲ檢査スルカニテ潜水艇ト書キ

取ノル外ハ全ク原文ノ倭ナリ。

見玉

甲

寫

梨

三月五日誌

大阪地方海員審判所

受命審判官角谷撥一

第二西潜水艦長心得高木武雄殿

照會

第二西潜水艦汽船機城丸衝突事件

右事件前之審理中、處在訖事項審理

上必要有之要素回答相煩度此致照會者也

訖

一貴官衝突顛末報告書中、方位、磁針方

位、方位、北八十七度西、磁針北九

二 磁鉄路南七十七度西一定位置及大槓
 島山頂ニ磁航ノ方位及距離
 三 本艦舷燈及檣燈揚揚ノ位置及水面上ヨリ
 ノ高サ、電燈・油燈ノ區別
 四 報告書第六項末尾ニ次ヲ機械ヲ停止シ全カ
 後退ノ準備ヲ爲ストリ右併止ノ時間及
 全カ後退ハ準備ニ止マリ後退運轉ハ概テ
 リレヤ若シ樹ケタリトセバ其時分
 五 本艦ノ午前四時三十六分同時三十九分及衝
 突ノ際等ノ位置ハ如何ナル方法ヲ定ムルヤ
 六 午前四時三十六分ヨリ同時三十九分ノ位置迄

ハ約十一海里ノ速カナルガ如キモ同三十九分ヨリ
同時四十五分ノ衝突位置迄ハ約七海里半
ノ速カナルガ如シ莫理由

七年前四時三十九分、位置ヨリ北八十七度西、

鐵路ヲ進行セバ鍋島燈台ガ第一鐘邊

ナルトトモシ然レニ第五項記載ノ如ク櫻城

丸ガ本艦ノ前ヨリ右舷ニ横切ル状況ヲ進行

シ時サニ横切ラトスル時鐵路ガ左舷ニ転シ

タリトセバ該船ノ鐵路ハ鍋島燈台向キ横

カ如キ状況ニシテ此場合受テ左舷ニ鍋島

又ハ與島ニ接近スル危険アル故ニ不可能事也

か如し如何

八高木第五項中、所要之櫻城丸、其右舷側ヲ
本艦示シ南具ツ引銃キ左回頭中ナリ
本艦ハ鐵路ヲ左舷ニ射テ櫻城丸ヲ避クルノ
モムヲ得ザルニ到リ去々トアリ然レバ本艦、前面
ヲ右方ニ横切リ南引銃キ左回頭中、船ニ對シ
鐵路ヲ左舷ニ射テ必要ナカルベク若シ左舷ノ
必要アリタリトセバ其時双方ノ距離ハ極ク接近
シ居タルモノナルベク午前四時四十分ニ至リテ四十
四五分頃ニアラホリシヤ

九櫻城丸ハ衝突迄在艦ニ先ト下トナリ如何ナルヲ第(三)

野

陳述録取書

第二十四潜水艦長心得

海軍大尉

高木 武雄

右者第二十四潜水艦汽船衝突事件ニ付
任意尤一通リ陳述シテ

一 本艦ト錫島トノ距離ハ目測凡ソ

五百米突位ト思ヒマシメ

一 衝突スル前帆舩ノ間ヨリ認メシ

汽船櫻木丸ノ舩体ハ衝突後致認

セハ舩体ヨリハ當大キイ様ニ見ヘ從ワテ

距離ニ遠クニ判断シテ居リマシメ

1211

手書
手書

の

1212

衝突後櫻木丸の船長は本艦を来
 リタルが其の時船長は汽船、左舷に
 本艦の青洋燈ヲ見テ居ル由青ト赤
 トが見へ出しタカラ本艦が面舵ヲ操リ
 タモノト見テ自分も面舵ヲ操リタト申
 シタルが其ノ事、實は本艦が汽笛ヲ
 吹セサル前ノ事ヲ誤解シテ申シテ居
 ル様ニ思ヒマス
 和の衝突ハル少し前汽船が面舵ヲ操
 ル前ニ取舵ヲ操リテ居ルヲ認メテ
 居リマス

(中田)

1212

陸

其ノ他 當時ノ状況ハ二月三日提出
 致シテ 置キムシタ 報告書ニ記載シ
 テアノ通リデアリマスガ 尚一言シテ
 置キフトガアリマス
 シレハ 衝突後 鋸島燈臺ノ燈臺
 守ガ本艦ニ来リ 只今汽艇櫻木丸
 ヲリ人 来リ潜水艇ヨリ汽艇ガ先キ汽
 笛ヲ鳴ラシタムトノ 証明ヲシテ呈シト
 スヒミコトガ 如何シマスルウカト申シシ
 タカラ 我ハソレナ事ハ 我々リ知ラヌ君
 ノ方デ 可然可断セヨト 其ノ相談ヲ

右録取ス

大正十一年三月一日

六軍艦報告

第三十四潜水艦汽缸衝突事件査

問會

拒止し之レシメ其ノ時燈臺守ノ言ヲ
 想像スルニ實際ハ當時職ヲ離シ居リ
 事安良ハ知ラサハ様子子テシタガ職務
 上知ラヌトモ云ヒ兼テソレトナシニ
 本艦へ汽笛発声ノ前後ヲ向ヒニ来
 タモノト思ヒマス

1215

1215

委員長海軍大佐 河合退之助

書記録事 福原繁一

1215

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

中田徳

1216

北

第三五番ノ三

大正十一年四月一日

査問委員長海軍大佐河合退藏

吳鎮守府參謀長正木義太殿

第二十四潜水艦櫻城丸衝突顛末報告ノ件

別紙第二十四潜水艦長心得高木武雄提出ニ係ル第

二十四潜水艦對南船櫻城丸衝突顛末報告寫一通

津浦鐵道條天改海員審判所 轉送 御取料相成

右依轉之

追而内地海員審判所ヨリ櫻城丸船長ノ提出セル衝突

突事件報告書寫一通取寄方御配慮ヲ得度

五三〇

陸

陸

(別紙五葉添付)

三

1218

第二十四潜水艦對商船櫻城丸衝突顛末報告ノ一

大正十一年三月二十日第二十四潜水艦長心得高木武雄



一 本艦櫻城丸ヲ見テ向テ途中大正十一年三月十五日午前四時四十分

五分備讃瀬戸鍋島燈台ノ南三十度西三八鐘ニ於テ商船

噸數 九。一噸 木造汽船

櫻城丸 所有主 大阪市北區東梅田所三丁目二九八水村庄吉

船長 福岡縣若松市老松町七丁目船務課次郎

衝突ニタリ

二 當時風向概南西 風力二分一 天候晴 波魚ノ潮流ハ約半節ノ

東流 海上薄霧ノ豫氣アリ 月ハ日蝕十七日半 高度五十度方

位西南西

三 本艦ノ原速力十一節 磁針格南七十七度西ニテ鍋島水道(鍋島

燈臺)上ニ面島ノ間ノ水路ヲ以下鍋島水道(概蘇ス)ニ向テ可キ

324

豫先鐵路より見張り嚴重ニシテ航行シ鍋島燈臺東方ニ遠
 かり横城並ニ操能ノ状況ハ良好ナリ。航海燈ハ正規ノ如ク點シ
 異状ナラザル汽角ノ状態ハ良好ナリ
 曰始より對手船横城ヲ認メタルハ午前四時三十分頃ヨシテ、
 距離遠ク僅ニ彼ノ精燈ヲ視認ス當時本艦ノ前艦ニ帆船
 介在セシカ最後ノ帆船ヲ避航シテ鍋島水道ニ直向シ横城
 北ニ注意ヲ耕ヒタルハ午前四時三十六分ナリ時ニ本艦鐵路南
 七十七度西、艦位鍋島燈臺ノ東北五鏈ナリ
 横城北ニ指鉈島ノ南東方ヲ東航シツアリテ本艦ノ右舷艦
 首ニ分ノ一點目測距離約ニ哩一位ス彼ノ左舷艦燈並ニ前後
 精燈ヲ認ム彼ノ航路ハ鍋島水道ノ中央ニ向テテト認メタリ
 仍テ本艦ハ横城北ノ前面ヲ横切ルコトナリ鍋島水道ヲ右側
 (北側)ニ接近シテ通過スルノ目的ヲ以テ而艦ヲ操リ北七十七度

西ニ表針ス

本艦機八十七度西ニ鐵路据ハリタル時午前四時三十九分ニテ

艦位錫島燈臺ノ南七十五度東回鐘半ナリ

五機機九ハ從前ノ鐵路ヲ直航シ次第ニ本艦ノ前面ヲ横切

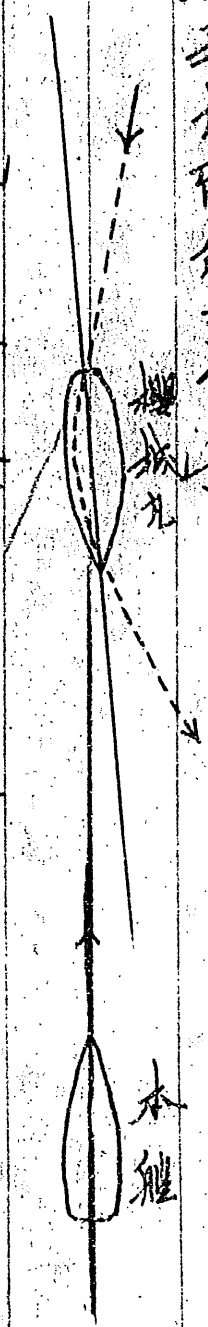
ラムントシツ、アリシカ將ニ本艦ノ前面ヲ横切ラムトスル時彼トハ

鐵路ヲ左舷ニ轉シタリ

仍テ機機九ハ一旦本艦ト同一線上ニ於テ正向シタル後南左回頭

ヲ續ケ圖示ノ如キ對勢ヲ生シタリ

彼我距離約一哩ト認ム



即チ機機九ノ後橋燈ヲ其前橋燈ノ左方ニ認メ右舷燈ヲ

即チ認メ左舷燈ハ僅ニ其光影ヲ認ムルニ將ニ没セル

一
圖

トセリ要スルニ櫻城丸ノ其右舷側ヲ本艦ニ示シ尚且ツ有續
 キ左回頭中ナリ茲ニ於テ本艦ハ鐵路ヲ右舷ニ轉シテ櫻城丸
 ヲ避クルノ已ムヲ得サルニ到リ午前四時四十分汽笛^鐘ノ聲ヲ發
 シテ鐵路ヲ左舷ニ轉シタリ
 六時能ノ結果櫻城丸ヲ益々本艦ノ右舷方ニ見ルニ到レリ
 然ルニ本艦ノ艦首船ニ點左廻シテ牛島ノ中央ニ向テ頃櫻城
 丸カ倏然右ニ回頭(即チ本艦ノ方ニ向テ)ヲ始メタルヲ認ム
 (但シ未ク汽笛ヲ發ス)時ニ櫻城丸ハ本艦ノ右舷艦首ニ點
 離艦約六百米ニ位ス
 茲ニ於テ本艦ハ函ヒ汽笛短ニ聲ヲ發シ右舷ニ極度ニ轉艦ス
 (ソレ並ニ艦首十五度ニテ左舷ニ回頭中ナリ)殆ント同時ニ櫻城丸
 ノ汽笛^鐘ノ聲ヲ初メテ聴取ス
 次ニ櫻城ヲ停止シ全力後退ノ準備ヲ為ス

六 櫻城丸愈々本艦ニ接近シ来リ本艦ノ艦尾ニ触レトスルモノト

認メタルヲ以テ艦尾ヲ躲ハス目処ヲ以テ反對ニ面艦極度ニ

轉艦シタルニ遂ニ躲避スルコト能ハス櫻城丸ノ右舷艦首ト

本艦ノ右舷艦尾ト衝突シタリ時ニ本艦ノ艦首方向約南

南西ニ衝突角約六十度ナリ

櫻木丸ハ末々機關ヲ後進シアラヌ

櫻城丸

八 敵艦當時本艦當直將校及艦橋當番

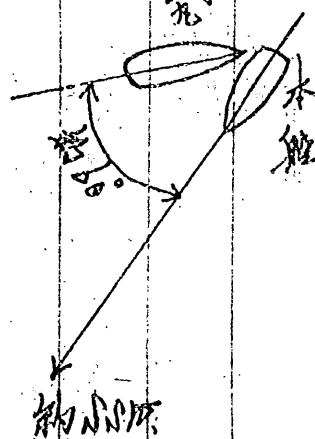
當時艦長自カラ艦ノ操縦ニ任ス

見張員 海軍兵曹長 福永 龜太郎

令 右 海軍一等兵曹 中林 兵三

操艦手 海軍一等兵曹 廣 重太郎

其他(番) 海軍一等兵曹 和田 針太郎



海軍一等水兵 富田 末次

海軍一等水兵 富田 末次

(終)

別紙

富田、艦橋清香、陳述書二通ヲ添テ

五ノ
目

大正十一年二月十五日

東京市港水難救助会会長 福永勲太郎

汽船衝突事故事情之関シ

一 和信日午前三時ヨリ船橋當番ノ一人トシテ船橋ニ在リテ

見張ニ從事シマシタ當時當直將校ハ船長ヲアリマス

一 船海燈標機軸ノ動作汽角等ニ異常アリマス

一 高船ハ最初本艦ノ艦首ヨリ少シク右方ニ當リテ赤燈

ヲ見セテ反航シテ居マシタ

一 船島燈塔ノ手前ニ本艦カシシク右エ変針シタ時ハ

高船ハ木ヲ変針スル以前カラ船路ヲ直進シテ居マ

シタ

五ノ
目

1225

一本艦ノ舵カ揺テ暫クシテオウ高船ヲ取艦ヲ取リテ
南船カ正シテ本艦ト向ヒ合フテ更ニ南船ハ取艦ニ廻ル

ノヲ認メマシタ

一艦長ハカモトニ聲取艦ト余セウシタ其時ノカイレンノ状況
トニ平素ト表リアリマセン

一本艦ノ艦首カ余程左ニ廻リタ時高船カ面艦ヲ取ル様
ニ見エタカラ直ニ其旨艦長ニ報告シマシタ

一艦長ハ直ニカイレンニ声取艦一杯ヲ號令シマシタ

一其時ノカイレンノ状況ハ平素ト表リアリマセン

一殆ト同時ニ高船ノ汽笛一音ヲ聞ク

一續テ艦長ハ右舷機停止ヲ余セウシマシタ

記

海軍等兵曹 廣重太郎

大正十一年二月十五日午前四時十分より衝突後マラ標飛
 一機專ら燈臺ノズツト手前ニテ南七十七度西ノ針路
 ニテ航行シ次テ南艦ヲ操り北八十七度西ノ鐵路トナル
 此、鐵路ニテハ燈台ニ非常ニ近キ様ニ思ヒタリ、此時汽船
 ノ左舷々燈ヲ認ム本艦鐵路ニ北七十七度西宜候ニテ航
 行ヲ續ケ汽船ノ右舷々燈ヲ認メ始ム、直ニ本艦汽
 角ニ声ヲ發シ取艦ヲ取り聞ヌナリ南ニ汽角ニ声ヲ發シ
 取艦一杯ヲ命セリ取艦ヲ極度操ル之トト若シト同
 時ニ汽船、汽笛一聲ヲ聞ケ、轉々右舷機停止艦度
 々々令木ヲナキ、最ニ南艦一杯ヲ命セリ南艦ヲ極度ニ

海軍

操ル此、時汽船の本艦右舷艦首ニ向テツアリ、
艦橋附近ニ衝突スルカト見エタルニ本艦、艦首左ニ廻リ
方止マリテ正ニ右ニ廻リ始メ時汽船の本艦々戻ニ衝突
スルニタリ

(外)

小田垣主理殿

言末ス

一、監査報告(長官)提出シタルモノ / 貴官ヨリお借シタルモノ

高木大尉ヨリ御書
而四達路一付
一書下
小田垣主理
海軍監長殿

二、監査報告(一冊) / 海軍監長ヨリ提出シタルモノ

三、監査報告(一冊) / 別長官(提出ノ形式ハ捺シラセシ
参考謀長カ、又ハ査問委員カヨリ小官(代)カ報告原文

四、添書(付セザルモノ) / 小官カウ誰シ(出シテ)報告カ判ラヌモノ

五、報告(書) / 送ラレタルモノ

六、報告(書) / 送ラレタルモノ

七、報告(書) / 送ラレタルモノ

八、報告(書) / 送ラレタルモノ

九、報告(書) / 送ラレタルモノ

十、報告(書) / 送ラレタルモノ

十一、報告(書) / 送ラレタルモノ

十二、報告(書) / 送ラレタルモノ

十三、報告(書) / 送ラレタルモノ

覽

點

海軍大尉 高木武雄

海軍審判所ノ請求ニ依リ吳鎮ヨリ同所へ送付スル
衛戩顛末報告
寫ハ先ニ提出セル報告原文共々
都合悪キ故(理由後述ノ如シ)
體裁ヲ改メ之ヲ區別ス為メ「一」衛戩報告「二」トニテ即別冊ノ
如シ 兩者ノ異同並ニ改訂ノ理由左ノ如シ

- 一、事實ニ関シ改變シタル箇所 絶對ニナシ
- 二、衝突後ノ處置、損傷箇所程度等ハ審判所(通告ノ必要ナク
且ツ之ヲ部外者ニ知ラセラルル)我潜水艦構造性能ノ一端ヲ窺ヒ
知ラセラルルトナラシメテ全然此項ヲ削除シタリ
- 三、主機械停止後、主電動機ヲ準備シタル事實モ同右理由ニ依リ
機材ヲ停止シ全カ後退ノ準備ヲナスニ書キ改ム

四、長官へ提出せられた報告原文ハ小官が艦ヲ損傷シ長官ニ對シ誠ニ

申請譯ナキ(衝突ヲ防法ヨリシタル見解トハ全ク関係ナシ)衷情ヨリ出テ且フ部内同僚ノ

参考資料ニモナラズ心持ニテ起草ニシタルモノヲ以テ唯衝突ヲ

防法ノ見地ノヨリ判断ニ出ツ海軍將校ノ責任觀念ノ真相ヲ了解

ニ得ル可キ審判所員ニ讀マシメテ無用ニテ且フ誤解疑心ノ種ト

ナル兵勘カラスト認メ込ル莫ハ成ル可ク削除ス但シ事實ヲ改

変ニタル所ナキハ(一)ニ述ブレ通リ

五、海軍用語ナシト別ニ衝突ヲ防法ニ使用スル用語アルモノハ成ル可クソレニ依テ

トシタリ例「面舵ニ転舵」ヲ「鐵路ヲ右舷ニ渡ル」トカシ

六、午前四時三十九分南北八十七度西ニ変針ノ理由ヲ書キ加ヘテ海軍將校

ニハ當然其理由ヲ了解シ得ルヲ原文ニハ省略シタルモノナリ

抄

右四町三十九分北七度西ニ針路据ハリタル時刻ナルヲ明瞭ニシテ
之唯一兵隊ノ針路変更ニ本艦が幾許分秒ノヲ要スモノナリヤ
判断ニ行サル部外者ヲシテ疑惑心ヲ起サシメサル為ノナリ

七、櫻城丸が本艦ノ前面ニ於テ取舵ヲ操リタル時ノ状況ヲ原文ヨリ

少シク詳シク且ツ之ヲ認メタル事實確實ナルヲ表示セリ

且ツ櫻城丸ノ尔後ノ航法ヲ推定シタル記事ヲ削除シタリ

惟ツニ此項が衝突ノ防法上最重要ノ件ニシテ小官ハ櫻城丸

が取舵ヲ取リタル故ニ本艦亦在避ケタルモノニシテ之ヲ適法ナリト

確信シツ、アリ故ニ櫻城丸が航路ヲ左左兼轉シタル事實ニ認メ

タリト記述スル以上他ニ言及スルヲ要セズ且ツ推定云々ハ轉

録ヲモ推定シタルモノナリヤノ誤讀ヲ避ケル為ニ削除シタリ

八

四野平分 鐵路左転後 本艦が上三面島を顧慮ヲ拂ヒタルノ記事ハ削除シタリ之ハ顧慮ノ為メ衛実ヲ避クル最善ノ處量ヲ缺キレ非ゾヤト誤解カレル惧アルヲ以テナリ 事實ハ原報告ニモ有之通り當時出来得ル限リ衛実回避ニ努ムルヲ上三面島ノ存
 在無クハ當時アル以上ノ最善ノ出来サリレト認ム(ナトカ手紙ナカリセノカト
 後ヲ遺憾ニ感スハ勿論ナモ) 故ニ上三面島ハ無関係ナリ 本艦が左
 ニ避ケタル後ニ於テ態々本艦ニ向ケ転舵シタル曲後レニ在リ而モ猶本艦ハ
 衛実ヲ避ケルニ為メ最善ノ盡シタリソレ以外ニ更ニ為シタル本艦ノ苦心顧
 慮ハ取テ部外者知ヌ要ナレ
 衛実時ニ於ケル本艦ノ船方任ヲ書キ加ヘヨリ 精老ニ知ラズ小官ノ
 心覺エノ程度ノ漢文ナリ一報告書ノ読者判断ニ付トテ人者略シ

九

録

クルモノナルが此記述ナリ本艦ノ艦ガ約南ナリヤ約西ナリヤ
ナトト感心ヲ審判所員モアムト思ヒ付キ 約南々西ト當時ノ感
其後ニ記述ス 従テ新ニ圖示ニタル如ク 櫻城丸ノ衝突針
路ハ約東トナル之亦當時小官ノ証カ認メタル所ニシテ 櫻城丸
ノ其後陳述ト大差アルナリ

十. 櫻城丸ガ衝突時未ク後進掛ケアラザルヲ附記シタリ

之本艦ニ同セザル所ニナレバ當時認メタル確實な事ニシテ
櫻城丸ノ陳述書ニ衝突前ニ合力後退セザルト本艦ノ現認
所ト大差アリ 是等ノ為附記シタリ

報告書 若干改メノ由來 並ニ趣意 右之如ク為後
仍白 如件 (經)

1234

1235

陸

一五七三

大正十一年四月二十一日

福田杏間委員長殿

杏間委員長 敬送付件

第三由渡水船流船櫻丸 海難報告書及関係書類一拾

櫻丸船長、海難報告書及関係書類一拾

右送附ス

現

海軍

1236

海難報告書

船舶番號及名稱

第一四〇號 汽船 梯城丸

船籍港 大阪市

船舶所有者名稱 水村 昌吉

船長、氏名住所並海技免狀種類

現住所 福国縣若松市老松町七丁目

原籍 廣島縣即調郡三庄所三十五番地

乙種船長 第三百二十四號 森 庫次郎

船舶發航港到港港並報告及事實發生シタル場所

及年月日

發航港 若松 到港港 大阪 大正十一年二月十三日

四時五十分 香川縣鍋山燈台附近於

万四

一言如左

大阪遞信局用紙

六、報告文ハキ事案ノ顛末

別紙ノ用

右及報告候也

汽船橋城丸船長

郷 森 庫次郎

右勝手也

大正十一年四月十七日

大坂地方海員審判所

地方海員審判所書記 菅島政之



阪共一八七號 十一年二月四日開報社納

1881

1238

不詳

本年午月十五日午前四時五分針車北北航途中香川如牛
 島右舷正横巨船の西分海軍並航路の針路針車北北航同
 針路の核方略航路を以て時我船首當り汽船一紅燈ヲ認ハ此時針
 車北北航同汽船一紅燈ヲ見分るベク進行中同船一紅燈首
 二紅燈ヲ現セシ依り本船より汽船航路信号短音発テ又同
 船即時應答汽船短音発テ依り本船ハ係り右舷ニ船首一方位
 約七八分間航路シテ高他船ハ兩舷燈ヲ現レ居り以て本船より兩
 汽船航路信号短音発テ又同汽船一即時應答汽船短音發
 案より依り本船一航方ニ據り互ニ針路ヲ右舷ニ取テ事ヲ信ス
 由ニ船首ヲ右舷ニ廻シ航路中同汽船突然其針路ヲ右舷ニ疾走シ其
 巨船接近初危候テ以て本船ハ急案盡テ臨機ニ度置トシ即時
 核方用意以テ進航機止短音發後後退金線一判即同汽船ハ本船首右舷
 より右舷首既相摩シテ航路セシト云時同船煙突一後部位ニトツス

大阪通信局用紙

ト云フ少ナキ音御言ヲ察シ同船ノ行ニ時止リ多行ニ思フ内田(ドウス)ヲササ
 未音御言ヲ察スル上ノ有船ノ行ニ時止リ多行ニ思フ内田(ドウス)ヲササ
 即時有船ハ汚水ヲ如何ニ濁ルニ時止リ多行ニ思フ内田(ドウス)ヲササ
 針路ヲ左舷ニ在リニ濁ルニ時止リ多行ニ思フ内田(ドウス)ヲササ
 前道強大ナク左ノ鍋島燈台東方ノ危鍵浮キ云得ト四分ノ一ノ浅地ヲ乘テ沈没
 可ク船ヲ乗テ相方流船ヲ汚船ニ初ニ且存海庫才出西習水艦ヲ乗テ知
 道水船損傷甚大同船ノ船長有荷物ノ者ヲ撥過破損水慢ト著ト認ム
 大正十一年十月十日
 汽船株式会社航海日誌年表記事別紙
 一 岸邊轉上曾村甚太郎認ム
 右 藤本也
 大正十一年十月十日
 地方海員審判所書記 貴島政也

阪共一八七號 十一月二十一日

1231

1240



進行停止短少後復退金途判却同船船首老船ヨリ右船兩船首尾相摩
 シシ船間セトスル時同船煙突ノ後部位ニテトツスト云フ少サキ音響ヲ發シ同
 船ノ行是時止リテ柱ノ思ウ内雨ビトツスト云フ少サキ音響ヲ發スルト共ニ
 同汽船ノ水船右船ノカ行ヲ阻ガタリ此時午亦四時五十分ナリ即時午
 船ハ汚水ノ如何ヲ測ル時モテク海水大暖水セテ認ムル所直ニ前進金途ヲ令シ針
 路ヲ左舷極極通ルニ異島トシ奥出ノ中央ニ向テ航走ス針路定ム共雨
 止前進強ク令鍋出東方約右鐘際ヲ分得ト四分ニ疎地ニ乗揚ハ沈没ヲ防グ
 幸船乗揚相平方汽船ヲ防阻シ初テ日本軍艦亦四潜水艦ト事ヲ知シ追テ
 船檢官ノ處同艦ノ船長者ニ何物カヲ為ト擲過破損水浸シタル
 者認
 右艦本及報告候也

大正十年三月十日

阪共一八七號 十十二下四時報社納

1881

1882

七

書

右橋城丸船長

綿森傳次郎

大阪遞信局海軍部の中

右勝手也

大正十年四月廿七

大阪地方法院判所

地方裁判所書記長島谷

島谷

大阪遞信局用紙

1243

